

こどもの日と鯉のぼり

成長をねがう

端午の節句は日本では五節句のひとつ。三月三日の上巳の節句（桃の節句、雛まつり）につづく本来は旧暦の行事である。桃にしる菖蒲にしる、そもそも邪気をはらうことが目的であった。女の子や男の子の無事の成長をねがうのも、そこに由来する。それが時代とともにあまたの変遷をくりひろげ、現在につながっている。

「こどもの日」は雛まつりとちがって国民の祝日である。終戦直後の法律では、「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」とある。こどもに男女

国民文化

江戸の武家文化は明治以降、一般の庶民層にひろがった。鯉のぼりは士族だけでなく立身出世を願う国民

風薫ると形容される五月。

その風をうけて鯉のぼりが中空を高く泳ぐ。

五月五日は「こどもの日」。

季節の節目ともされるこの日は、

古来より端午の節句あるいは菖蒲の節句とよばれ、

その風習は中国に端を発するところ。

の区別はない。だが、男児偏重との議論がくすぶっていたのも事実だ。他方、感謝の対象が母だけであるのも気にかかる。

とはいえ、鯉のぼりを見ると、緋鯉と真鯉の差はあってもオスとメスは区別されていない。昭和初期の童謡では「おおきい真鯉は おとうさんと小さい緋鯉は こどもたち」と歌われていて、父の存在がクロージアアップされている。

鯉のぼりは縁起物である。江戸時代中期からの風習で、黄河上流の竜門をのぼれば竜になるという中国の故事にちなんだものである。まさに登竜門として、立身出世のシンボルとなった。大正時代から歌われてき

た文部省唱歌には「百瀬の滝を登りなば たちまち竜になりぬべきわが身に似よや男子と 空に躍るや鯉のぼり」という歌詞がある。

勝負する

広重の「名所江戸百景」の水道橋・駿河台の図には、手前に真鯉が大きく描かれ、遠くに富士山の小さな姿が見える。そこには鐘馗様を描いた縦長の幟や赤い吹流しもみえるが、尾をくねらせた鯉はきわめて写実的である。

水道橋や駿河台の界限は武家屋敷が軒を連ねていた。戦を本来の家業とする武家にとって、男児の誕生と

の希望のシンボルとなったのである。明治政府によって演出された国民文化は武家の規範をモデルとしていた。質実剛健、質素儉約、良妻賢母、忠君愛国などの精神を特徴とする。こ

れをサムライゼーション（武家化現象）と称して、一九八〇年代の民博のシンポジウムでおおいに議論したことがある。その発想は梅村忠夫初代館長によるが、議論のなかから「町人化現象」という概念も誕生した。

サムライゼーションとは、武士団が解体し、武士道が危機に瀕したとき、逆説的にはあるが、武家文化が国民一般にひろ

かれた生活文化として普及した現象をさしている。他方、チョウニナイゼーションとは遊芸や道楽の世界を是とする町人文化に由来し、大正期や高度成長期の大衆文化につながる」と目された。

武者人形を飾る端午の節句は男児の成長と出世をねがう武家文化の伝統をひき、鯉のぼりの歌は文部省唱歌にも採用されていたから、国民文化として演出された面がつよい。しかし、町人も武家に負けじと鯉のぼりを立てたというから、江戸時代にすでに武家文化の枠を超えていたともいえる。

二〇年ほど前の調査によると、端午の節句の実施率は約三割であった。雛まつりのそれが約五割であったのに比べると低い値である。鯉のぼりを立てるのはもっぱら父親の仕事で、息子に対する愛情表現になっていると分析されていた。

最後にエピソードをひとつ。

一九九五年五月、阪神・淡路大震災で西宮市の避難所となった香櫨園小学校に静岡県のボランティア組織が約五〇〇匹の鯉のぼりを贈った。翌年から、夙川沿いの住民たちはロープを川にわたし、その鯉たちを泳がせるようにした。ところが、年を経るにつれ損傷がすすみ半数がかえなくなつた。そのため住民らが不要となつた鯉のぼりの提供を地元呼びかけたが、それを揚げる家庭が少なくなつて思うように集まらなかつた。そこで、ふたたび静岡県や京阪神の静岡県人会などが支援に乗り出し、二〇一〇年五月、あつまつた約二三〇〇匹の鯉の一部が夙川に飾りつけられたという。

二〇一一年三月二日、東北と関東が未曾有の地震と津波にみまわれた。死者や行方不明者は二万七〇〇〇人を超え、罹災者はいまだ不自由な生活をしいられている。五月の空を泳ぐ鯉のぼりは子どもたちに勇気と希望をあたえてくれるにちがいない。



夙川にたなびく静岡県から贈られた鯉のぼり(提供・西宮香櫨園親の会香友会)